

「会計研究の危機と日本の会計学界」 に関するディスカッション*

*Discussion of “Accounting Research Crisis
and the Japanese Accounting Research Community”*

中 野 誠 (一橋大学 教授)
Makoto Nakano, Hitotsubashi University

要 約

本論文は、米国および日本の会計学界のあり方に関する学術的エッセイである。両国の会計研究の構造・コミュニティを客観的に分析するとともに、日本の会計研究の将来展望を描いている。日本の会計研究に関する筆者の強い危機感からか、ところどころに、過激な表現も見受けられる。だが、その分析は正確であり、示唆する点は本質的である。

Summary

This academic essay portrays the current situation of the accounting research community in the U.S. and Japan. The author analyzes the structure and society of accounting research in both countries. He also presents a unique future perspective of accounting research in Japan. Though his expression seems radical, the analysis itself is quite precise and essential.

1. はじめに

本論文は、米国および日本の会計学界のあり方に関する学術的エッセイである。米国および日本の会計研究の構造を客観的に分析するとともに、日本の会計研究のあり方について将来展望を描いている。太田氏の性格なのか、あるいは日本の会計研究に関する筆者の強い危機感からか、ところどころに、過激な表現も見受けられる。だが、その分析は正確であり、示唆する点は本質的である。このような異色論文へのコメントは容易ではないが、率直な感想とコメントを記す。

2. 太田論文の骨子

アメリカにおいて、研究能力ある会計学者の数が徐々に減っている点について、実際のデータを示しながら、客観的に記述している。そして、新卒会計Ph.D.の急激な供給減に対応して、米国労働市場では会計学者の給料は急上昇している。それにもかかわらず、会計専攻Ph.D.の数は減少している。

筆者は、その理由は、「会計研究そのものに構造的な問題がある」と考え、その構造的な問題を、いくつかの側面から考察している。第1に、会計教育・研究における「実務志向の弊害」をあげている。すなわち、実務志向が強すぎるがゆえに、「大学の会計コースで会計実務ばかりが教えられ

* 連絡住所：中野 誠 〒186-8601 東京都国立市中2-1 一橋大学大学院商学研究科

ているために、知的好奇心に満ちた優秀な研究者志望者が、会計学者を目指さない」という。

第2に、会計研究の多様性の低さを指摘している。Demski (2007) を引用しつつ、研究大学における研究者としてのキャリア形成のためには、論文掲載とテニユア獲得を目標に据えざるを得ないことから、会計研究の論文がパターン化している点を指摘している。そのために、「人類の知の総体に本質的な貢献」をする学術的な姿勢が失われているという。

次に、日本の会計学界について、その現状と構造を分析し、とりわけ競争圧力の低さ、研究アプローチの多様性の高さを指摘している。日本における競争圧力の低さは、研究アプローチの過度な多様性を許容している。

しかしながら、結論としては、純粋に内発的な動機から研究に取り組む環境の存在から、真に革新的な業績は日本の環境からのほうが出やすいのではないかという明るい展望（願望?）を示している。

3. 周回遅れか?

冒頭で述べたとおり、本論文は表現面で若干の過激さがあるものの、太田氏本人の経験と近年の北米での議論が融合されて、現在の会計研究の構造を客観的に記述しているものと思われる。日本において会計研究・教育に携わる者として、非常に有益な論稿である。読みすすめるうちに、怒りがこみ上げてくる読者もいるかもしれない。けれども、太田氏はできる限り、客観的な記述を心がけている。最後まで読むと、実はわれわれ自身が今後、深く内省すべき論点、避けて通ることのできない論点、正面から引き受けなくてはいけない論点を突きつけられる。

以下では、本論文を踏まえて、特に日本の会計

研究が「周回遅れ」（太田氏によれば「3周遅れ」）となっている現状について、筆者（中野）の個人的な見解を述べることで、この異色の論文へのコメントとしたい。

日本の会計研究が「周回遅れ」であるのは、主として以下の要因によるものと考えられる。第1に新卒Ph. D. のJob Marketにおける競争が緩やかな点。第2に就職後の競争圧力が緩やかな点にある。

第1の要因は、さらにいくつかの理由に分けて考えることができる。第1の理由として、日本語の壁がある。日本の大学生人口は減少の方向にあるものの、それなりに大きい。その大学生への教育は、従来はほとんどが日本語で行われてきた。そのため、日本語を話せる大学教員である必要がある。そこに「語学の壁」という参入障壁があった。新卒Job Marketの競争が緩い第2の理由は、需要と供給のミスマッチである。大学における会計系教員への需要は相対的に大きい。それに対して、供給すなわち大学院博士課程修了者の数が十分ではなかった。そのため、Job Marketでの競争はこれまでは、他分野と比較して、緩やかに推移してきたものと考えられる。第3の理由は、旧帝国大学の歴史的経緯である。旧帝国大学の経済学部では、その設立趣旨から、経営・会計系の教育・研究の量が歴史的に少なかった（「量」が少ないと言っているだけで、「質」について議論しているわけではない点に御注意いただきたい¹⁾）。需要と比して、「極少数精鋭」と言っても良いかもしれない。旧帝国大学には商学部や経営学部は存在せず、経済学部の中に経営・会計系の教育・研究が位置づけられている。そのため、商科大学系国公立大学や私立大学博士課程修了者は、これら旧帝国大学出身の研究者とは激しい研究面での競争をする必要は、それほど多くはなかった。この点は、経済学や歴史学や社会学の博士課程修了者

の競争に目を向ければ、明瞭だと思われる。

続いて、「周回遅れ」である二つ目の要因、すなわち就職後の競争圧力が緩やかな点について考察する。これにも、いくつかの理由が考えられる。第1に、日本のほとんどの大学では、就職時にテニユアが付与される。近年、任期付採用は増加しているものの、限定的である。歴史を振り返れば、ほとんどの場合、就職時にテニユアが付与される。テニユアが付与されない場合と、付与される場合を比較して、人間心理を考えれば、どちらが競争的かは議論の余地もないであろう。第2に、大学内評価の問題をあげることができる。若手・中堅教員は、研究も大切だが、教育や学務への貢献が総合的に評価される職場で生きている。特に学務への貢献は、日常的に目に見えるため、評価を気にする場合には、研究への影響が甚大である。しかしながら、これら2つの理由は、会計研究固有の問題ではなく、日本の大学一般に共通する話かもしれない。

4. 展望

最後に、太田氏は日本の会計学界の国際的な地位を向上させる戦略として、いくつかの示唆を与えている。その中でも筆者が特に、大切だと感じたのは、次の点である。すなわち、「先行研究に依存しすぎないこと」である。「実証革命」に遅れをとった国としては、いわゆる「先進国モデル」に追随しがちである。だが、幕末・明治維新期の日本のように、フォロワーが得られる果実は限定的であろう。Demski (2007) の “Do not play the game. Redefine the game.” という講演語録は印象的である。

社会科学の隣接分野である経済学や社会学では、より基礎的な問題群に関して、学術的な取り組みが許されている。それに対して会計研究にお

いては、会計基準の国際比較分析、投資家の意思決定有用性、経営者の利益管理など、相当に限定された実践色の濃いテーマに研究者が過度に集中しすぎているように感じる。

太田氏が言うように、「自分が重要だと考える経済現象を見つけ、その現象を引き起こしている根源的なドライビング・フォースが何であるかを深く洞察」することを、われわれは、どれほど実践しているであろうか。この文章を読んだ瞬間、私はしばらく動けなくなった。社会科学の本質を突いているからである。

全く新しい研究を始めた若き研究者の卵に対して、「それは会計か?」、「仕訳をするとどうなるか?」などと問うてはいないだろうか。それでは、最優秀層の若手研究者候補生は会計研究の世界に足を向けない。若者は本能的に本質を嗅ぎ分ける。「世界の貧困を撲滅するにはどうすればよいのか」、「戦争をなくすにはどうすればよいのか」、「地球環境に優しい経済活動とはどういうものか」、「人々が幸せになる働き方とはいかなるものか」などという基礎的な問いに答えようとする他領域の学問に、ピュアな若者は魅かれるものである。そこまで巨視的テーマでなくとも、社会に貢献する、あるいは社会構造を解明するような、新しいタイプの研究が求められている。そのようなフロンティアを示せば、あるいはその種の挑戦を許容すれば、若者はテニユア問題や報酬問題などを比較考量せず、会計研究の世界に踏み込み、学術的水準の高い研究成果を生み出してくれる可能性があるのではないだろうか。

太田 (2010) をカプセルに入れて埋めておき、20年後に再読する作業は、楽しいかもしれないが、怖い気もする。

《注》

1) この点については天野(2009)および橋木(2009)が、歴史資料に基づき、経緯を詳細に記述している。

《参考文献》

天野郁夫, 2009. 『大学の誕生 上・下』, 中公新書.
猪木武徳, 2009. 『大学の反省』, NTT出版.
橋木俊詔, 2009. 『東京大学エリート養成機関の盛衰』.
林周二, 2004. 『研究者という職業』, 東京図書.